●読者からのお便り

拝啓、秋酣の候となりました。扨て方丈様のテレビ拝見しました。感銘多大です。国境を越え民族を越えていわゆる偉大なる方丈様の檀家の一員である事が有難いです。以上申し上げてご挨拶とします。

横浜市南区　**大場　貞蔵**

善光寺が国際的な交流の場として重要な役目を果たしつつあることに、卒直に感嘆の念を禁じ得ません。これが着実に実績として重ねられ、発展していきましたら、日本仏教は世界の舞台に於て、善光寺というユニークな寺院活動を通じて、その現代的展開を歴史的に評価されることになると信じます。

今般は立派な仏像を御贈り下さいまして、有難く拝受いたしました。私などは在家の出身であり、幼い頃も何ら宗教的環境に育ったわけではありません。それが長じて、このように仏教の世界へと導かれたのは、よほど宿縁のうながしと思わざるを得ないものがあります。日常の生活の中で仏様に手を合わせたり香を焚いたりする行為が、人の内なる仏心を目覚めさせるということは必ずあるものと信じておりますが、そうしたことをますます確信できる人との出会い、御縁をわが身に頂けますことを深く感謝する次第です。

東京都北区　**形山　俊彦**

本日は「アメリカの禅見聞記」をお送り下さいましてありがとうございました。陽光寺境内を歩く黒田様、仏真寺におすわりになっている黒田様の御立派なお姿、そのうえ前角老師というお兄様が居られる事、すばらしいお話にびっくり致しました。昔、明美がお父様の御立派なお姿と、四・五人のお供がついて出てこられてびっくりしたことをききましたが、やはり御兄弟の皆様はお父様の血すぢを引きつがれて居られるのですね。不動院のお坊様が明美の踊りを見て、感心して下さいました。私もこんなことではだめだ、もっともっとすべてに研究しなくてはならないと思いました。仏門の世界とは本当に修行に修行を重ねる精進の世界なのですね。私は一生を床屋の世界で通してきました。娘は踊りの世界、大金は書の世界それも墓石に残される書の世界、紺屋様はあいぞめの世界、そして黒田様は佛門の世界、それぞれ世界は違っても自分の力いっぱいはげんできた事は立派な生きがいだと思います。益々の御進歩をかげながらお祈り申しております。

東京都練馬区　**大金きよみ**

拝啓　今年は例年になく雨の多い夏、

海も山も人の出が少なかったようです。夏休みもすぎ学校も始まり、二百十日もすぎほっとしております。

先生ご一家皆々様で健勝のこととお慶び申し上げます。私、信松院の門前に住んでおります糠信でございます。先生がご指導に来られた一年間親子で大変お世話になりました。お礼の挨拶もせず今日まで来てしまった事、どうぞお許し下さい。まずは私どもの近況をお伝え致します。私は㈱栄楽パンに勤め40年にならんとしております。妻は近くの縫製工場にパートとして働いております。そして子供達、(長男は死去)次男恒樹は都立東高校を卒業し浪人一年、今年、国立東京工業大学に合格し在学、長女陽子は都立第二商業高校情報処理科三年在学、お蔭で皆元気に過しております。

今が有るのは親子そろって寺に足を運び時をすごした事が大変よかったのではないかと思います。禅、写経、読経みんなで行い、忍耐、集中心を少なくとも自分のものにしたのではないかと信じております。ありがたく感謝致しております。信松院はもとより昼間先生にも「ともしび、自灯明、法灯明」のご本まで戴き一方ならぬお世話になっております。

先日昼間先生の宅にお邪魔した際、先生のご本を拝見し善光寺そしてお子様方の衣姿のお写真を見て感動致しました。私どもも頑張って一日一日を大切に過すよう努力致すつもりです。息子が大岡山まで通学しておりますのでいつの日か善光寺さんのお参りをしたいと思っております。

私の心境として今こう思っております。

城作り　子らが学ぶも
公の　力　かりたる
我が家族　いつかはせねば
恩がえし

と思い子供らに言い聞かせております。

東京都八王子市　**糠信　義男**

前略　この度は方丈様のテレビご出演の録画を出張から帰って昨夜拝見いたしました。深い感動を受けました。正に方丈様の面目躍如としたお姿があり、そこから体全体での教えをうけ、又親としての深いきずなを感じ、厳然と現在に生きる大いなる指導者を拝見いたしました。例え建て前論者にはどううつろうと一切かまわず、ひたすら生きるお姿を拝見しうれしくなりました。

形だけつくり目先に生きる人々の多い昨今うんざりしている矢先、正に清涼の想いを頂戴できまして誠にありがとうございました。

これからも一層ご健勝にて我等凡人をご指導下さいますよう心から御願い申し上げます。

東京都中野区　**中村　正信**

拝啓晩秋の候、先生におかれましては、益々御健勝のこととお喜び申し上げます。幾通もお手紙をいただき、本当にありがとうございました。御返事が遅れましたことを深くお詫び申し上げます。おかげさまで妻ともども元気にいたしております。こちらの暮らしにもやっと慣れてまいりました。

大学は今月から始まりましたが、予定通りPhDコースに登録することができました。ただし正式にはMphilというコースです。と申しますのは、東洋アフリカ学院(SOAS)を含むロンドン大学の規則で、すべてのPhDの学生は、はじめにMphilとして登録し、一年後に指導教官の判断でPhDのコースに切り換えることになっているからです。指導教官のスコルプスキー先生の指示に従い、授業は先生のクラスに週二回出席し、残りの時間はすべて自分の論文にあてております。PhD論文には、こちらの希望していました通り、Vajrāvalīという12世紀にインドで著された密教儀礼に関する文献を扱うことになりました。テキストの英訳とサンスクリットとチベット訳の校訂テキストが論文の中心になると思います。そして、個人指導の時間として毎週一回、テキストを読む時間を作っていただけました。一般にはPhDの学生の個人指導は、せいぜい二週間に一度と聞いておりますので、これは異例のことのようです。

以前にも御報告したかと思いますが、宿舎が大学から徒歩で20分位のところなので、授業のない日も大学の図書館に通っております。また、大学の図書館にない文献や写本を見るために、ロンドン市内にあるインド政庁図書館(Indian Office Library)や王立アジア協会(Royal Asiatic Society)にも時々出かけております。こちらにまいりましてから知ったことなのですが、これらの機関や、少し足をのばしたオックスフォードやケンブリッジの図書館には、前世紀にネパールやインドで収集されたサンスクリットの写本がかなり所蔵されており、私の専門とする密教関係の典籍もその中に多く含まれています。あらためて、この国の東洋学の歴史を思い知らされた次第です。こちらにいる間に、少しでもその伝統の一端に触れることができればと思っております。

今年の関東地方は天候が不順と聞いております。くれぐれもおからだをお大事にお過し下さいますようお祈りいたしております。簡単ではありますが近況の御報告をさせていただきました。

森　雅秀拝